

令和6年 夏季の小展示

暮らしを楽しむ ^{やわた}八幡のやきもの ^{なんざんやき}の南山焼

会期

令和6年6月22日(土)～8月12日(月・振休)



月に梅文湯呑み
(松花堂美術館蔵)

マボロシのやきもの？「南山焼」

「南山焼」は、江戸時代の後期から昭和の頃まで断続的に八幡で作陶されたやきものです。「南山焼」には、大きく3つの画期があります。

【第1期 初期南山焼】 その始まりは、大坂出身の浅井周斎（1720～1800）という人が八幡に移り住み、やきものを作ったことにさかのぼります。長濱尚次（1797～1878）が著した「周斎伝記」という資料には、宝暦6年（1756）末に「八幡志水町南に一山を開き、種々の薬草を植、その中に一室を構へて陶器を焼来て楽しみとす」と記されています。周斎は志水町の南方の山で、楽しみとして、やきものを焼いていたようですが、「八幡南山焼とて人もてはやしぬ」とも述べられ、周斎のやきものが「八幡南山焼」として人気があったことが窺われます。しかし、周斎が作ったやきものはどのようなものであったのかは謎に包まれています。なぜなら、現在確認される周斎作品が極めて少ないからです。周斎没後、弟子の周助という人に受け継がれたようですが、やがて途絶えてしまいました。

【第2期 再興南山焼】 明治30年代に至り、八幡で南山焼を再興しようという動きが起こります。円福寺の僧や地元の有志の尽力により、京都清水の陶芸家である帯山与兵衛・九代（1856～1922）が八幡に迎えられ、円福寺の竹藪あたりに窯を開き、やきものを作りました。与兵衛が没して「南山焼」は再び衰退の途をたどったようです。

【第3期 昭和南山焼】 その後、昭和50年代頃、八幡の南心（立本三郎）という人物が「南山焼」の再興に取り組みました。自ら工夫を重ね、やきものを焼き、「竹南山焼」と称しました。しかし南心没後は「竹南山焼」も姿を消すこととなりました。

このたびの展示は、帯山与兵衛・九代が関わった第2期にあたる「再興南山焼」を主とした内容です。